

ストラスブールで学んだ3つのこと

1. はじめに

ストラスブールはフランス北東部に位置する街である。また、ドイツとの国境近くであり、ストラスブール駅からトラム（フランス国内を走る路面電車）を利用すれば20分～30分でドイツの都市ケールに降り立つことができる。ストラスブールに存在する文化や建築、言葉からフランス・ドイツ両国の香りが漂うのは、この近さに因るところが大きい。ゴシック様式が美しいストラスブール大聖堂を仰ぎつつ、フランス語とドイツ語が同時に並ぶ看板に囲まれながら、私たち20人は2週間という長くて短い研修に参加した。この研修のプログラムは、ストラスブール大学でのフランス語の講義、現地で日本語を学ぶ学生との交流、遊覧船や欧州議会の見学などの課外活動、家庭訪問で構成されていた。本稿では、私がこの語学研修において学んだ3つのことを紹介する。

2. ストラスブールで学んだ3つのこと

まず1つ目は、フランス語の会話において最重要視されるのは文法ではないということである。この事柄を私が痛感することとなったエピソードをここに示したい。それは現地で受けたフランス語の講義にまつわるものだ。私たち研修生一同は、教室内でのフランス語以外の使用を先生から禁じられていた。初回の講義でその禁止令を受けた時、研修前からフランス語をある程度話すことができた一部の研修生以外は苦笑していたように記憶している。私はフランス語のみで自分の意図を的確に伝えなければならないというプレッシャーに負けて、講義初日を一言も発することなく終えてしまった。このプレッシャーの大きな原因となっていたのは、私の中にある「完璧な文法を用いて組み立てた文章でなければ、考えていることを正しく伝えることができない」という意識であった。しかし、翌日以降に、徐々に慣れてきた他の研修生が先生と話しているのを見て、この意識は薄らいでいった。というのも、彼らの話していたフランス語は、完全文になっていなかったり、動詞の活用が間違っていたりと必ずしも完璧に文法規則に従うものではなかったけれども、先生はきちんとその意図を汲むことができていたからである。さらに、先生も、完全文での説明を私たちが理解できない時にはわざと文を崩してくださったり、単語と身振りだけで説明してくださっていた。これに気付いた時、私は文法規則にこだわるあまり何も話せなくなってしまう自分をひどくばかしく感じたと同時に、次の機会では思いついた単語だけでも言葉にしてみようと少しだけ前向きになれた。

2つ目は、辞書を引いた時に最初に出てくる単語や表現が常に一番優れているものだとは限らないということである。この研修中に受けていた講義では、フランス語でのプレゼンテーションやコミュニケーションが中心に据えられていたのだが、プレゼンテーション原稿の添削や先生との会話の中で、事前に辞書で調べておいた単語や表現を訂正

されることがままあった。先生に訂正した理由を尋ねたところ、私が使おうとしていた単語や表現はネイティブの人にとって耳なじみがなく、ややこしいものであり、訂正後のものの方がより簡単で伝わりやすいからだと教えていただいた。訂正後の単語や表現の中には、私の持っている辞書には載っていないものもあり、フランス語を使えるようになるには辞書の世界に閉じ籠ってはいけないのだと悟った。外国語学習時に辞書をいつも肌身離さず持っている私にとっては少々ショックではあったが、“生きたフランス語”を意識する良いきっかけとなったと考えている。

3つ目は、自主性や積極性がいかに大切であるかということである。この研修のプログラムについては「1. はじめに」で軽く触れた通りだが、実は自由時間も多く設けられていた。研修生はこの時間を使って、買い物に出たり、大聖堂や美術館を巡ったり、さらには、ストラスブール大学で日本語を学ぶ学生と食事に行ったりした。講義で習った表現をその日のうちに実際に使うことのできる環境は、語学学習のモチベーションを向上させるという観点からするとこの上ないものであったと思う。ただし、その恩恵を受けられるのは、自主的に外出し、積極的に現地の人と交流を図ろうとした場合のみである。不必要に物怖じせず、自主性と積極性を持ち、それらをきちんと発揮することの大切さは日本での生活の中でも感じる場面は多々あるが、フランス語学短期研修というこの機会により一層強く心に刻まれたと感じている。

3. まとめ

ここまでで、私がストラスブールで学んだ3つのことを見てきた。特に1つ目は、この研修に参加しなければ他に学ぶ機会を持たなかったかもしれないことであった。この気付きのおかげで、私は中学時代から持ち続けた外国語への抵抗感をようやく少し拭うことができたように思う。また、3つ目に関して、私は研修生の中では自主性や積極性をきちんと発揮できなかった方であることは自覚しており、反省点の一つに数えている。

出発前は何もかもが不安で、一時期は応募した動機を見失うほどであった。しかし、行っていざ研修を始めてみると、そこに待っていたのは穏やかできれいな街、長い歴史の中で紡がれてきた伝統と文化、優しく親切な先生とわかりやすい講義で、私はすぐにその魅力の虜になった。研修の終わりが近づく頃には、残り少ない日程を惜しむ心さえ生まれていた。この研修を通して学ぶことは数多くあったが、フランスをより好きになれたことも大きな収穫である。フランスをより好きになれたことで、帰国後の学習・研究のモチベーションが飛躍的に向上したと感じている。現地で学んだことを忘れないように、また、自分が納得のいくようなフランス語のレベルに到達できるように、やらなくてはいけないことは山積みである。いつの日か、もう1度フランスへ留学できるように精進していきたい。